

私たちの町の文化財 池のほど不思議

■第1話 消えた池と残された民話

豊富な水を蓄えた大地が広がる熊本市域には、大きな河川である白川があり、その周囲にはいくつかの溜池や水路があります。長い歴史の中でつくられてきたそれらは現在残っていないものもあります。熊本の昔話には池に関する民話があります。「池の上町の大蛇」(※)というもので、池上町の池に大きな蛇の夫婦がいて悪さをするので、清正公と村人が協力して大蛇退治をするというものです。最後は毒を飲んだ蛇が苦しみのあまり舞い上がったところを城壁の上に置いた大砲「アランストロン」で打ち抜き退治します。そして大蛇が落ちたところが「蛇畠」、尾のところが「尾崎」、尻尾の先が「谷尾崎」、頭のところが「田崎」と呼ばれるようになった、というものです。清正公の名前があるのでこの物語の時期は1600年の初め頃が舞台といえます。「田崎」や「谷尾崎」など地名の伝承に由来する物語と思えますが、ここで重要なのは「池」と「蛇」のほうです。その頃にはこの池上町には大きな池があったということです。

熊本市西区の池上には独鈷山と妙観山があって、その間には現在井芹川が流れています。その一帯には「味生池」という灌漑用の人口池がありました。およそ1100年前に造られた池に関する話が今年の「みにくま」のテーマです。※引用「肥後の民話と伝説」熊本史談会編

熊本市文化振興課 芥川太朗氏

今年の執筆者は芥川氏と師富氏のおふたりです。池上の地辺寺や味生伝説等が出てくる予感がするモン

